

# 信 毎 俳 壇

## 坊城 俊樹 選

耕耘機我が道を行く夏の道  
空缶が空を見てゐた夏の恋  
我先に泥撥ね飛ばし夏休み  
落款の極まる色に梅雨兆す  
酒樽を神輿に仕立て練り歩き  
子報より予感で選ぶ夏帽子  
窓の外すべて緑の暮しかな  
しどけなく重なり合ひて椿落す  
はつ夏の黒き天守や鳥城  
曲尺に残る此の名更衣  
佳作  
花見酒酌みつづつ嗚咽元兵士  
薔薇ひらく秘めたる時を解き放ち

(長野市) 福沢健太郎  
(佐久市) 市川小夜子  
(下諏訪町) 長田多美恵  
(中野市) 茅川 菊水  
(長野市) 田中 重美  
(長野市) 宮沢 朝子  
(信濃町) 松本 博子  
(飯山市) 小野沢竹次  
(松本市) 小松 久志  
(長野市) 白鳥 寛山  
(長野市) 青木 武明  
(高山村) 春日きみ子

選評

一句目、良質の「滑稽俳句」とはこのこと。あたかも真夏の道を耕運機自身が意思を持って闊歩する。しかしこの句は「写生句」でもあり眼前に真夏の風景が広がる。二句目、どこか過ぎ去ってしま

った夏の恋の寂しさが。ジュースが何かの空き缶が楽しかった恋を彷彿とさせる。三句目、夏休み最初の風景だろう。我先にと避暑地の景色の中に飛び込んで行く。この休みを満喫するために。

## 今井 聖 選

左肩さやかに描けて夏に入る  
城垣に謎の烙印夏来る  
断層に鯖の干さるる糸魚川  
山椒味噌戦仕掛けて負けし味  
熱の子に父置きくれし策籠  
患ひて春の装ひみな仕舞ふ  
病室の窓に眩しき映の初夏  
郭公や早目よき豆を遣りわけし  
味噌汁の焦げの匂ひや露地薄暑  
つまらなげな猫の顔垂せ春炬燵  
佳作  
掘り出されしはし自失の蛙かな  
夏浦田舎出て寝る青畳

(長野市) 宮沢 朝子  
(富田村) 金本 牧子  
(坂城町) 柄沢 満  
(佐久市) 西田 和彦  
(長野市) 福沢 ナナ  
(松本市) 塩原 弥生  
(飯田市) 大石 昭重  
(南相木村) 猿谷 秀  
(長野市) 萩原 宏祐  
(飯山市) 小野沢竹次  
(佐久市) 吉岡 徹  
(松本市) 中村 百仙

選評

一句目、作者はメークの折、左肩が苦手。今日のはうまく描けた。こういうことが瑣事に見えて人を明るくするものだ。二句目、謎の烙印の想像が楽しい。史実に謎が隠されているかもしれない。三句目、

糸魚川から静岡に至る巨大な活断層帯に鯖が干してある。もちろん鯖は海で捕られたもの。日本の構造がそこにも出ている。四句目、作者の脳裏から敗戦のことが去らない。山椒味噌を食うときですら。

## 神野 紗希 選

初鱗切れ目鋭きおびれして  
さんしょあえはかみなりみたくないなあし  
谷折りの紙スプンなり栗アイス  
毛虫とすとと枝より落ちて駆け出しぬ  
更衣きちんどうくく花時計  
肉汁にジュウと成鳴き夏に入る  
山園に生まれて夏の海に老い  
折り探りてその場でかじる山の独活  
奥社へと杉のかほりや夏立ちぬ  
星月夜アックカバーを歳時記に  
佳作  
春電も雨が滲みこむ魚斜面  
憲法記念日どこに置いたか見つからぬ眼鏡

(富田村) 金本 牧子  
(中野市) 風間 一乃  
(小諸市) 加藤 陽介  
(飯山市) 小野沢竹次  
(長野市) 田中 重美  
(須坂市) 富田 孝弘  
(神奈川県大磯町) 真 逆  
(上田市) 久保 孝  
(長野市) 勝山 学  
(塩尻市) 可能レーベル  
(茅野市) 茅野 岳士  
(佐久市) 大塚たみ恵

選評

一句目、たくましく海を泳ぐ初鱗の力強さを、尾鱗の切れ目の鋭さに見いだした。二句目、山椒のびりりと舌に痺れる辛さを、雷にたとえた。口中に雷が暴れているのだとしたら、大変だけれどち

よっと楽しい。三句目、あるある、こんな紙スプン。山の売店かしら。ほっこり甘い栗アイスも地元感たっぷり。四句目、「とすと」の擬音が毛虫の大きさ、存在感を物語る。人も毛虫も互いに逃げる、か。